

大学選びの 視点

第8回

大学入学者選抜に関する情報

このシリーズでは、高校生が志望大学を考えたときに、どのような情報を提供し、指導に生かしていくのか、高校の先生方へのインタビューやアンケートの結果などを中心に紹介していく。

今回のテーマは、「大学入学者選抜に関する情報」である。現在も高校の先生方は進路指導において、一般入試の入試難易度、入試科目、入試方式、アドミッション・ポリシーなど、さまざまな情報を活用している。しかし、高大接続改革が進み、大学入学者選抜が学力の3要素を多面的・総合的に評価する

ものになっていくとすると、現在主に使われている入試情報は大学選びにおいて優先度の低いものになるかもしれない。他方で、これまでは大学があまり公表してこなかった、もしくは公表していても重視されていなかったような情報が、より重要となるかもしれない。

高大接続改革が進む中で、大学入学者選抜に関する情報の在り方がどのように変わっていくのか、ガイドライン読者アンケートとインタビューから考えていく。

高校教員アンケートより

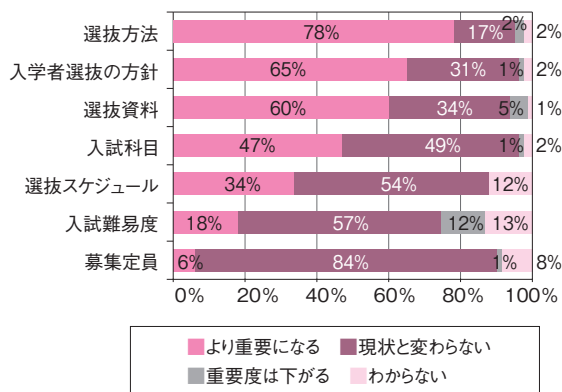
ガイドライン編集部では、今後、高大接続改革が進む中で、各大学の入学者選抜に関する情報の重要性がどのように変化していくか、ガイドラインモニターの先生方にアンケートを実施した（2015年9月実施、回答84件）。まず、その概況を紹介した上で、重要度が上がる・下がるとと思われる情報については、その理由として挙がったコメントを紹介する。

入試情報では選抜方法やAPの重要度が増す 大学の中身情報、出口情報もより重要に

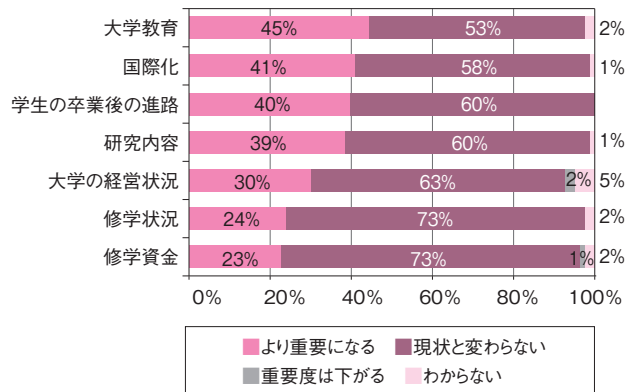
入学者選抜に関する7つの情報について、今後の進路指導において、重要性がどのように変化していくか聞いた。**<図1>**は、「より重要になる」の割合が高い順に並べ替えたものである。

選抜方法（小論文、面接、学力試験等）は78%が「より重要になる」と回答し、最も割合が高かった。次いで、入学者選抜の方針（アドミッション・ポリシー）と、選抜に関わる資料（調査書、活動報告書等）については、6割以上が「より重要になる」と回答した。入試難易度（偏差値、ボーダーライン等）は、「より重要になる」が18%

<図1> 入学者選抜に関する情報の重要度



<図2> 入学者選抜以外の大学の情報の重要度



である一方、「重要度は下がる」も12%と、意見が分かれた。

また、入試情報以外の情報の重要度がどのように変化していくのか聞いたところ、大学教育、国際化、学生の卒業後の進路、研究内容などは、4割前後の先生が「より重要となる」と回答した<図2>。

「大学選びの視点」では2014年から毎号、「大学教育」「研究内容」「卒業後の進路」「修学状況」「修学資金」など、さまざまな情報について、アンケートやインタビューから進路指導での活用を考えてきた。それぞれの項目の意義や活用方法については、当該の記事をご参照いただきたい。

選抜方法

- ❶ 従来の指定校推薦などに代わって、大学に入ってから積極的に活動の中心となってくれるような生徒を選抜する新しい方法が模索されるだろう。1回の試験のみで選抜せず、高校と大学が連携し、学生と何回か接触する中で入学者を選ぶような方法が取られるかもしれない。
- ❷ 東京大、京都大でも推薦入試・AO入試がなされようとしている現在、選抜方法はより重要になると思う。受験勉強がテクニックのみにならないような選抜にしてほしい。
- ❸ 一般入試中心の大学において、面接等でどれだけ丁寧に選抜するか見極めることが必要。それによって、高校でつける力が変わってくる。
- ❹ 現時点でもさまざまな入試方式、試験科目があるが、今後をもっとパターンが増えていくのではないかと思う。そうすると、受験生は今まで以上に自分の得意な試験内容で大学を選ぶことが多くなるのではないかと危惧する。入試の内容で大学を選ぶことは本末転倒であるとも思うが、受験生心理を考えるとそれも仕方ないのかもと思う。いずれにせよ、新大学入試で導入される2つのテストが大きなカギを握っているだろう。
- ❺ 小論文や面接は頭打ちになるように思います。事前の準備をかなりしてくれるので、準備したかどうかで差が出るのが現状でしょう。

入学者選抜の方針（アドミッション・ポリシー）

- ❶ それぞれの大学がAPに基づいて大学独自の選抜方法をとる可能性があり、確認が必要だと感じる。これまでのように一律の受験指導では対応できなくなるかもしれない。
- ❷ 入試問題は今まで以上に各大学の個性が出るものとする。その基準になるのが、APであろう。今後の入試対策としては、基礎学力を充実させるのは言うまでもないが、各大学がどのような特色を持ち、どのような生徒を求めているかを的確に判断しなければならないと考える。

- ❶ 「どういう学生が欲しいか」「どう方法でとるか」を鑑みて、つまり生徒が大学の要求に合うかどうかを見極めて出願することになるから。
- ❷ 大学がどのような学生を求めているのかが受験生に具体的に伝わるように、選抜方針、選抜方法、選抜資料については情報公開の重要性が一段と増すと思います。今後、受験生は、自分の長所、能力を伸ばすことができ、自己肯定感をより育むことができるような大学を志望するようになるからです。
- ❸ 今まで抽象的な表記にとどまっていた大学のつきたい力が明確になり、大学の個性がよりわかりやすくなっていくはずである。そう期待している。
- ❹ 大学側が求める人物像を今以上に把握することが、合格に必要となると考えるから。

選抜に関わる資料（調査書、活動報告書等）

- ❶ 評価対象とされるものが増え、より複雑になるでしょう。そこでの重要度が出願書類に反映されると考えます。
- ❷ 観点別評価の導入によって、これまで以上に評定平均値などの扱いが複雑になっていく気がする。
- ❸ 筆記試験ではない部分が重視される場合、高校での活動実績が重視されることもあり得る。その手の情報を入手することは重要になってくると思う。
- ❹ 「多面的・総合的」である以上、入試当日の出来はもちろん、それまでの生活における取り組みも含めて、評価の対象とされるべきだと考えるから。
- ❺ 大学が育てたい生徒を選抜していくので、それに合わせて選抜方法や入試科目を選択すると思う。当日の試験よりも高校時代に何をしていたかが重要になってくると思われる。
- ❻ 教科の学力だけでなく、生徒の人間性などの情報が重要になると思うから。
- ❼ 選抜資料については面接の材料とはなるが、決め手ではなくなると考えられるため、重要度は下がるのではないかと考える。

入試科目

- ❶ 入試科目や選抜方法が変わっていく可能性があるため、今後これらの情報には注意が必要だと感じています。そのため、大学側にもこれらの情報を迅速に提供することを望んでいます。
- ❷ 新テストは段階別評価が基本なので、それによって入試時点での学力を把握するのは大学側にとって難しくなる。よって、各大学の個別試験が重要になってくると考えられる。

選抜に関するスケジュール

- ❶ 選抜方法と合わせてスケジュールも当然重要となってくるだろう。大学の体験セミナーに参加することが必須の推薦入試なども、もっと増えてくるかもしれない。
- ❷ 従来の選抜方法から、より時間のかかる選抜方法になると思われる。その結果、入学者選抜のスケジュール自体が前倒しされる可能性が高いと感じている。
- ❸ 選抜方法が多様化すれば、現状でも夏休みから2月頃までなど、時間をかけて選抜を行う大学があるように、入試が長期化する大学が増えると思います。
- ❹ 選抜試験の時期については、いろいろと考えることが必要になると思われる。日時の設定などが大きく変えられると、併願パターンも変化すると思われるため。

入試難易度

- ❶ 1点刻みの大学入試センター試験から、段階別評価になる大学入学希望者学力評価テスト(仮)で各大学の難易度がどのようになるのかは最大の関心事である。
- ❷ 新テストでは1点刻みでなくなることも考えられるため、入試難易度も現在のものでは対応できなくなると考えるから。
- ❸ 難易度にとらわれて学びたいことができないというミスマッチが起きてしまうと生徒にとって大きな損失になる。APをより重視した大学入学者選抜になるなかで、入試難易度の重要度は下がるだろう。
- ❹ 大学入試自体が、大きく変化しそうなので、募集要項の確認が今まで以上に重要になるだろうと思います。その中で、

偏差値やボーダーラインは必要なくなるような気がします。ただし、学力や努力量を問わない選抜方式が増えることがないようにしてほしいと思います。

- ❶ 各大学の従来の選抜方式が変わるので、合格・不合格の客観的な判断基準となるボーダーラインが予想つかない。
- ❷ 入試難易度は従来の物差しでは測ることが難しく、しばらくの間は新しい物差し作りの試行錯誤で、重要度が下がると思います。
- ❸ 3つの理由から、入試難易度は重要度が下がると思う。
 - ① 受験生の価値観の多様性が大きくなる。現に高校選びにおいては、中学生は偏差値よりも総合的な学校の魅力を評価している。
 - ② 単純なテストの得点に左右されにくい入試になるので、偏差値は一つの指標としての役割になる。
 - ③ 「高等学校基礎学力テスト(仮称)」「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」が素点ではなく段階別の成績提供をするのであれば、偏差値のような数字の僅かな差を求めることはできなくなると考えられる。

募集定員

- ❶ 入試の大部分がAO入試のようになるとすると、APの重要性は高まると考えられる。今までの一般入試とは異なる選抜方法がとられると考えられるため、選抜方法に関する情報も重要であろう。そのような入試で入学者を本当に選抜できるのかということを考えると、募集定員に関しての情報も欠かせないだろう。

あまり変わらない

- APについては、よりわかりやすく具体的になっていくのではないかと感じています。選抜方法についてもより具体的に情報が提示されるのではないかと感じています。ただ、全体的にはそれほど変えられないのではないかと思います。
- 高大接続改革が進んだとしても、入試情報に関する情報は現状と大きく変わるとは思えない。入試のシステム等よりも、学生のやる気の問題が大きい。

❶ 「より重要になる」 ❷ 「重要度は下がる」 ○ 「現状と変わらない」

岩手県立大船渡高校 副校長 千葉 貢 先生

- 高大接続改革が進む中で
- 大学入学者選抜に関する情報も変化

今年9月15日に公表された高大接続システム改革会議「中間まとめ」にも示されているように、今後、各大学の入学者選抜の方法を、「学力の3要素」を多面的・総合的に評価するものへと転換していくこととされています。

「高等学校基礎学力テスト（仮称）」や「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の導入などが提案されているものの、個別試験が現状と同様に教科型の学力試験であれば、大学入学者選抜に関する情報の在り方はあまり変わらないでしょう。しかし、小論文、プレゼンテーション、面接、集団討論等が多くの受験生に課されるようになるのであれば、変わっていくものもあると思います。

- 探究活動を繰り返す中で
- 小論文や面接の力も高まる

小論文・面接の有無など、**選抜方法**に関する情報は、当然ながらより重要になると思います。

平成32年度（2020年度）から「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」が導入されることを考えると、高校現場では多様な選抜方法に対応するノウハウの蓄積を急がなければなりません。しかし、現状でも推薦・AO入試などを中心に、多くの大学が小論文や面接を課しているにもかかわらず、教科型の学力試験への対策ばかりを重視し、そうした多面的な選抜方法に関する研究を進めていない高校もあるため、問題だと感じています。小論文や面接に対応する力は、付け焼刃的な対策では身につけません。生徒が課題を発見し、自らの経験や興味・関心と関連付けながら考えを深め、論文等にまとめたりプレゼンテーションしたりする活動を繰り返す中でこそ培われるものだからです。逆に言えば、探究活動を充実させてきた高校にとっては、大きなチャンスになると考えています。

学習活動歴も、より重要になると考えられます。しかし、現在用いられているような書類からは、高校時代までの実績はわかっていても、思考力等を測ることはできず、大学での学びについていけるかどうかを判断することはできないはずで、あくまでも、面接や小論文、学力試験などと組み合わせるべきものだと思います。

ただ、**高校時代に作成した論文等**は、ぜひ評価してもらいたいと考えています。現状ではできている高校があまりありませんが、探究活動の中で作成した論文やプレゼンテーション資料などをポートフォリオ化して、生徒の学習の指針にするとともに入学者選抜の参

考資料にもしてもらいような取り組みができると良いと思います。

- APを確認し、大学のことをよく知ることで
- 生徒に本当に合った大学を勧めたい

アドミッション・ポリシー（AP）は、より重要になっていくでしょう。多様な方法で入学者選抜を行うようになるのであれば、大学が受け入れたい学生像をより明確に示し、受験生もAPを確認し、求められる学生像と合った大学に出願するよう、変わっていくと考えられます。

さらに、異なる入試方式を設けるのであれば、それぞれにAPを明示するべきだと思います。求める学生像が同じなのであれば、本来は選抜方法を変える必要がないからです。しかし、現状でも大学は一般入試、推薦入試、AO入試と、さまざまな入試方式を設けていますが、方式ごとにAPを示している大学は多くありません。

ただ、自校の卒業生を見ていけば、例えば「この大学のAO入試では研究室でリーダーシップを発揮できる学生を求めている」など、APに明示されていなくても大学ごと・入試方式ごとに傾向が見えてくるはずです。まずは卒業生の性格や行動パターンなどを記録・蓄積し、それと照らし合わせることで、それぞれの生徒の適性や志望に合った大学、入試方式を勧めていくように、出願指導も変わっていく必要があるでしょう。

一方で、**入試難易度**は、現状よりも重要度が下がるかもしれません。というのも、「高等学校基礎学力テスト（仮称）」や「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」については難易度を測ることはできるかもしれませんが、個別試験が小論文、面接、プレゼンテーション等を中心としたものになるのであれば、従来のような教科型の試験の成績によって難易度を測ることは難しくなると考えられるからです。そうすると、入試難易ランキングなどを中心とした従来の進路指導では、対応できなくなるのではないのでしょうか。

今後の進路指導は、生徒本人の適性、志望、やりたいことなどを聴いた上で、その希望が叶う大学を紹介できるようなものになっていくべきだと考えています。そのためには、教員は生徒のことをよく理解するとともに、大学の教育・研究の内容や入学者選抜の特色についても、これまで以上に知識を増やしていくことが必要になるはずです。もちろん大学にも、これまで以上に教育を充実させ、求める学生像や自大学の特徴などを明確に発信してもらいたいと思います。そして、高校と大学で情報交換を繰り返しながら、高大接続をより円滑なものにしていきたいと考えています。